

たデモだったのである。一七八〇名の武装警官部隊の分遣隊の一翼の騎馬警官が反ナチ・デモ隊の中に繰り返し突っ込んだので、地区一帯は五時間にもわたる凄惨な闘いの舞台となった。反ナチの人びとは、警官隊の阻止線を突破できなかったけれども、まちがいなく勝利は彼らのものであった。警官隊がその場になかったら、二万人のナチスとカフタン信奉者たちはおそらく袋叩きに遭っていたであろう。

SWPは、ただちに反応して、二月二八日のロスアンゼルスにおけるドイツ会館内「同盟」集会場に赴き、再度のデモを呼びかけ、ニューヨークでの勝利の余勢を駆ってさらに徹底的なものにしようとした。五千人を超える人びとがホールの中でファシストを拘束し、警官が救出に駆けつける騒ぎとなった。同盟の攻勢もやがてストップし、全く面目を失ってしまい、その後には予定していたサンフランシスコ、フィラデルフィアでの大会もキャンセルするにいたった。

一九三九年二月になって、ニューヨークの突撃隊の集会に反対するデモをSWPだけが呼びかけていたという事実は、ナチの時代のひとつの現実を証示する。すなわち、個人としてシオニストは、スクエア・ガーデンの闘いに参加したが、ユダヤ人組織（宗教組織あるいはまた政治組織）のどれひとつも敵と闘う用意をしていなかったのである。

第19章 シオニズムと日本の「大東亜共栄圏」

一九三五年当時、中国には一万九八五〇名のユダヤ人がいた。上海にユダヤ人街がひとつ、満州にもいまひとつ存在した。上海はイラク出のスファルデイ、エリーアス・サスンとその社員の末裔によって支配されていた。彼らは阿片戦争以後商店を開設し、都市上海の発展の中で信じられないような巨万の富を築くにいたった。満州ハルビンのコミュニティはロシア出身のユダヤ人によって構成され、ツァーによる東清鉄道建設以降定住していたのである。その後ロシア革命と内戦による難民の到来によって膨れ上がることになった。

シオニズムは「アラブ人世界」では弱体であった。アラブ人たちは世界で最も富裕な民族コミュニティのひとつを形成し、その快適な生活を捨てる気はさらさらなかった。中国内のシオニストはユダヤ系ロシア人であった。彼らもまた帝国主義者たちのプレゼンスにとつて不可欠の構成部分となり、中国国民になる形で同化することを望まなかった。資本家か中産階級だった彼らにはソ連への帰還も重要な関心事ではなかったし、彼らのアイデンティティは中国北部一帯にやってきた白衛軍傘下の反セム主義難民によって強化された。シオニズム運動の分離主義には持ち前の魅力があり、中でも改訂派が最大の訴求力を有していた。ロシア・ユダヤ人は帝国主義者や軍事化された環境に囲まれた商人で、ベタール運動は熱狂的な資

本家・帝国主義者たちの志向と、すでにルンペン匪賊になっていた白衛軍の雰囲気の下ではきわめて実践的だったミリタリズムとを結びつけた。改訂派は自らの周りに見出した過酷な世界に理想的なかたちで適合した。

「大東亜新秩序建設のアクティヴな構成素」

ハルビンのユダヤ人コミュニティは一九三一年の日本軍による満州征服まで繁栄した。この時の日本軍高級将校の多くは、アレクサンドル・コルチャック将軍を支援してボルシェヴィキ軍と闘った一九一八〜二二年のシベリア出兵に参加経験をもち、白衛軍がとりつかれてきた反ユダヤ熱にも「感染」していた。やがて満州各地の白系ロシア人は日本軍の傀儡「満州国」政府の支柱となり、多くは日本軍部隊に直接雇われた。日本の警察に護られた白系ロシア人ギャングはユダヤ人から金を脅しとる行動をとりはじめたため、一九三〇年代半ばには、ハルビン在住のユダヤ人の大半が深刻な反セム主義に耐えしのぶよりは、国民党の支配する南部に逃れる道を選ぶようになった。

ハルビンからユダヤ人がいなくなったことで満州経済は重大な影響を被り、一九三五年には日本軍はそれまでの方針を転換せざるをえなくなった。軍は自らに特徴的な反セム主義の解釈、「世界ユダヤ人による陰謀」説をとっており、これは強力な効果をもっていたのであるが、日本の利害関心に適合するようつくりかえることも可能であった。日本軍は世界ユダヤ人の眼前に、満州をドイツ・ユダヤ難民のための可能な避難場所としてちらつかせ、親シオニズム路線のポーズまでとろうとした。そうすればアメリカ・ユダヤ人が満州に投資し、日本の中国侵略に対するアメリカ世論もなだめられ、さらにはナチと日本の友好

関係の肥大化も緩和させられよう、と考えたのである。だが、これは空しい望みであった。ユダヤ人はアメリカ政府への影響力をまだほとんどもっていなかった。さらにいえば、ステイーヴン・ワイズほかアメリカ・ユダヤ人指導者たちは日本との協働には徹底して反対しており、日本をナチス・ドイツの必然的な同盟相手とみなしていたからである。

日本軍は満州にとどまっているユダヤ人に対し、わが軍への協力こそ諸君の利益になると説き、少なからず白系ロシア人の行き過ぎた行動を抑制したり、ロシア・ファシスト連盟の機関誌『ナシシ・プーティ（我々の進路）』を取り締まったりしてユダヤ人たちを納得させることになり成功した。ハルビンのユダヤ人指導者、敬虔な医師で、この地方の信徒共同体に深くかかわっていたアブラハム・カウフマンは、日本軍の政策の変更にいたく感激し、一九三六／三七年の日本外務省の一報告書によれば、カウフマンとその仲間は極東ユダヤ人評議会の設立許可を申請した。その目的は東方在住ユダヤ人すべてを組織し、日本のための宣伝活動をおこなうことにあり、分けても日本の反共主義を支持することであった。¹⁾

極東ユダヤ人コミュニティが結集した三つの大会の最初のものは一九三七年一月ハルビンで開催された。会議の様子は『ハ・ダゲル（旗）』の一九四〇年一月号に掲載された写真でわかる。タイトルはヘブライ語ながら満州国改訂派のロシア語雑誌であった。演壇は日の丸・満州国国旗・シオニズム運動旗で花綱状に飾られていた。²⁾ ベタールの人員は儀仗兵として行動した。会衆に向かって演説したのは日本軍情報部〔奉天陸軍特務機関長〕の樋口将軍、白衛軍のヴラシエフスキー将軍、傀儡満州国高官の面々であった。³⁾

一九三七年の会議では世界の主要なユダヤ人組織すべてに向けて決議が発せられたが、そこでは「新しいアジア構築のために日本政府および満州国政府と協働する」⁴⁾ことが謳われていた。これに呼応して日本政府もシオニズムをユダヤ人の民族運動として認めた。⁵⁾ シオニズムは満州社会のエスタブリッシュメント

にとつて不可欠の構成部分となり、ベタールにも公式の旗と制服が支給された。もつとも、この新たな関係にも混乱の契機は存在していた。たとえば、ナチス・ドイツが満州国を承認したのを祝う記念パレードがおこなわれたが、ベタールはその参加を断られている。⁽⁶⁾しかし、一般的にこの満州地域のシオニストは、日本の体制との友好関係にきわめて満足していた。第三回の大会についてひとりの参加者は、一九三九年一月二三日に「町中歓迎にわきたつている」と報告している。⁽⁷⁾会議はいくつかの決議をおこなった。

会議はここに日本帝国が東アジアで平和を確立せんとしている大事業に祝意を表し、戦争が終結すれば東アジア諸人民が日本の指導の下で民族独立への歩みを開始するであろう。⁽⁸⁾

決議は、さらに続けて次のように述べていた。

ユダヤ・コミュニティ第三回大会はユダヤ人が東亜新秩序建設に積極的に参加するよう呼びかける。あらゆる国と緊密に相互協力し、コミンテルン打倒闘争という断固たる基本理念によつて導かれるこの新秩序に参加しようではないか。⁽⁹⁾

中国人民の敵に協力したシオニストたち

満州国のシオニストたちは日本軍に協力することによつてユダヤ人にいくらかでも裨益するものを得たとはいえるであろうか？ 極東ユダヤ人の研究では代表的なヘルマン・デッカーは「顧みて、ユダヤ人避

難民のかかりの人びとが満州に定住するのを、極東大会がより容易にしたということはできない。せいぜいのところ入国が認められたのは数百名であつた。⁽¹⁰⁾と結論づけている。第二次世界大戦末期、ソ連軍は満州に侵攻しカウフマンは身柄を拘束された。最後は一年間もシベリアで奉仕協力を強いられた。満州国のシオニストが当地域の日本の支配体制構造に深くコミットさせられたことは確かである。日本の征服を支持したわけではなかったが、いったんロシア白衛軍が制御されると、シオニストは日本軍のプレゼンスに全く不平を唱えなかった。中国国民党の復権からも何ら得るところはなく、共産主義革命も恐れていなかった。シオニストは日本のナチス・ドイツとの関係強化をけつしてよろこばず、アメリカ・ユダヤ人への影響力行使して太平洋でのアメリカとの妥協を促進することでむしろそれをおさえようと望んでいた。したがって日本の対独政策を肯んじなかったものの、日本のほうでは満州のシオニストを対日協力者とみなしていたことは疑いない。

叢書・ユニベルシタス 705

ファシズム時代の シオニズム

レニ・ブレンナー著

芝 健介 訳

